

第6回

(通算26回)

『逆転の構図』

2005.3.17

世の中には「作用・反作用」とか、「美女と野獣」とか、一見真反対に思われるものが実は深い関係にあったりすることがよくあります。

東洋医学の重要な考え方に「寒熱」というものがあります。もちろん寒と熱は反対側に位置するもの。しかし、だからといって無関係であるとは言いきれません。

女性に多くみられる冷え症、これは実際に冷える部分（足など）に触れてみれば確かに冷たくなっています。だから診断は「寒」。しかし一方で、カゼをひいた時の診断として知られる「表寒」の時には多くの場合体表は冷えてはおらず反って発熱。つまり体表は温かくなっている、しかし診断は「寒」。これはいったいどういうことなのでしょう？

前者の扱いについては前回お話ししたとおり、附子や乾姜といった温熱薬を投与したり、血の巡りを改善したりという方策がとられます。しかし、後者に対しては全く異なる生薬、例えば麻黄や桂枝が用意されます。どうして前者が附子や乾姜で後者には麻黄や桂枝なのか。同じ「寒」なのにどうして対策が異なるのでしょうか。これを説明するには「冷えには温熱薬」だけでは限界があることはご理解いただけるものと思いますし、冷えにも種類がありそうだということは想像に難くはありません。

体温が上がっているにも関わらず「寒」と診断するには理由があります。「自覚的に悪寒があるから」がその説明です。しかしそれでは「自覚的にあるから診断する」理由とは何なのでしょう？

東洋医学には相対的にももの考えるという特徴があります。絶対的な尺度として「体温が上がっていたら熱」とはしない理由があります。つまり「たとえ体表の温度が上がっていたとしても、裏がもっと熱くなっていれば相対的に表は冷えて感じるのが我々である」という経験則を大切にしているところに特徴があります。実際にこのような場合にとられる方策は「麻黄や桂枝で発汗」であり、それはつまり「発汗によって内なる熱を放散する」という作戦に他ならないのです。

「熱を制することで寒を除く」というわけです。

話しを「冷え症」に置き換えてみましょう。「体表が冷えていないのに冷えを自覚する」なら、その原因として「裏が熱くなっているから相対的に表に冷えを感じる」というケースが存在していてもおかしくはないことになりますね。もしそうなら、どう対処すればよいか…。

本日の番外編では「個の医療」について考えるヒントとして「身体と食べ物」についてとりあげてみます。「自分の身体」とは何か、から「個」について考えてみましょう。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

柴胡 附子 乾姜 麻黄

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、そしてどのように使い分けるのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

四逆散：柴胡、枳実、芍薬、甘草

小柴胡湯：柴胡、黄芩、半夏、人参、生姜、大枣、甘草

大柴胡湯：柴胡、黄芩、半夏、枳実、芍薬、大枣、生姜、大黄

加味逍遥散：柴胡、山梔子、薄荷、当归、芍薬、牡丹皮、茯苓、
蒼朮、生姜、甘草

苓姜朮甘湯：乾姜、茯苓、白朮、甘草

大建中湯：乾姜、蜀椒、人参、膠飴

桂枝湯：桂枝、芍薬、生姜、大枣、甘草

麻黄湯：麻黄、桂枝、杏仁、甘草

葛根湯：麻黄、桂枝、芍薬、生姜、大枣、甘草、葛根

ポイント

■自覚としての「寒」、他覚としての「寒」

浅岡俊之

www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

西洋医学的治療を施す場合、「診断」は重要視され、治療に先立ち求められます。当然のことですが診断あつての治療ですから、これは当たり前のことです。

それでは東洋医学の治療に際してはどうでしょうか。

よくある質問というものがあります。

「〇〇病の人が治らなくて困っているが、何かいい漢方はないか」

「△△と言っている人がいるのだが、何かいい漢方処方はないか」

いかがでしょうか。ここに診断というものは存在しているでしょうか。

繰り返し述べてきたことですが、何も東洋医学に診断というものが無いわけではありません。

東洋医学の診断とは「証」であり、人の状態のことであると申し上げました。

そして東洋医学の診断をどのように行うかについてお話し続けております。

本日のテーマは「寒」です。東洋医学にとって重要な「診断」ですが、その原因は一つとは限りません。

西洋医学に例をとれば

「胃潰瘍」という診断があつたとしても

その原因は「ストレスだけ」ではありませんね。

東洋医学においても同じこと。1つの証（診断）の原因は1つとは限りません。

そして原因が異なるのであれば対策が異なるのもうなずけるところであると思います。

東洋医学においては、「診断における主体が患者本人にある」という立場をとります。ここに西洋医学の診断との根本的相違点があります。

西洋医学においては客観性が重要視されます。したがって数値化や画像化が必須の手順となります。しかし逆に言えば、そのような表現の仕方ができない（しにくい）ものに関しては、扱いが困難になるという性質を持つこととなります。

反対に東洋医学では「主体が患者本人にある」ので、たとえ数値化しにくく画像化しづらかろうが、それと正面から向き合わなければならないという宿命を背負うこととなります。

「寒」を体温計での測定値で診断するわけにはいかない、なぜ東洋医学においてはそうなのか、その理由をお考えください。そうすれば、「個の医療」という言葉の本当の意味もご理解いただけるはずです。